

## 特定非営利活動法人サロン 2002

### 《2014年8月 月例会報告》

\*\*\*\*\*

# 現役最年長記者 賀川浩さんが語る

## —2014FIFA ワールドカップ・ブラジルと U-18 フットサル—

賀川浩 (スポーツジャーナリスト)

\*\*\*\*\*

【日 時】 2014年8月30日 (月祝) 19:10~21:30 (軽く飲食しながら)  
~1:00頃 (賀川さんも残っておられた!)

【会 場】 フットボールサロン442 (墨田区江東橋4-16-5 SK ビルB1)

【演 者】 賀川浩 (スポーツジャーナリスト)

【参加者: 会員・メンバー (14名)】 安藤裕一 (インターナショナル SOS/サロン2002 理事)、大河原誠二 (筑波大学附属高校蹴球部卒業生)、奥崎覚 (会社員)、賀川浩 (スポーツジャーナリスト)、春日大樹 (筑波大学蹴球部)、金子正彦 (会社員)、田嶋亮 (筑波大学附属高校蹴球部卒業生/小学校教諭)、田中俊也 (三田市整形外科)、茅野英一 (帝京大学)、徳田仁 ((株)セリエ)、中塚義実 (筑波大学附属高校/サロン2002 理事長)、本多克己 ((株)シックス/サロン2002 理事)、松岡耕自、ほか1名

【参加者: 未会員 (12名)】 阿部博一、神本建、北原由、木之下潤、高平豊明 (サッカー文化フォーラム&アーカイブス代表)、丹野吉己、羽廣太 (fcFA FOOTBALL SHOP 店舗責任者)、松田トシユキ、矢作典史、山内博之 (ピバ! サッカー研究会)、山下弘忠、和田一恵、

注) 参加者は所属や肩書を離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書きはあくまでもコミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するものではありません (ご本人の了解が得られた方のみ公開しています)

【報告書作成】 春日大樹 (筑波大学人文学類4年)

## <目次>

### 第Ⅰ部 第1回全日本ユース (U-18) フットサル大会について

- 導 入 「フットサル日本上陸 20 周年」 (中塚義実/p3)
- 補 足 「全国大会設立の背景」 (本多克己/p3)
- 本編 1 「フットサルの歴史」 (賀川浩/以下同様/p4)
- 本編 2 「フットサルの意義とこれからの展望」 (p4)
- 質疑応答 1 「東西サッカー文化の違いとサッカーの歴史」 (p4)
- 質疑応答 2 「シュート技術の向上とフットサル」 (p5)

### 第Ⅱ部 2014FIFA ワールドカップ・ブラジルについて

- 導 入 「ブラジル滞在概要」 (本多克己/p5)
- 本編 1 「ブラジル滞在総括」 (賀川浩/以下同様/P5 )
- 本編 2 「悪質なファウルとジャッジについて」 (p6)
- 本編 3 「ネイマールとペレ」 (p7)
- 本編 4 「21 世紀のサッカーの進化」 (p7)
- 本編 5 「優勝国ドイツの強さ」 (p8)
- 本編 6 「ザッケローニのマネージング能力とクラマーの気遣い」 (p9)
- 本編 7 「試合の流れを掴めなかった日本代表」 (p9)
- 本編 8 「これからの日本代表」 (p10)

おわりに 「当日の感想と本報告書作成に関して」 (春日大樹/p11)



賀川浩さんと参加者 (2014年8月30日@フットボールサロン44-2)

## 第 I 部 第 1 回全日本ユース (U-18) フットサル大会について

### 導入 ～フットサル日本上陸 20 周年～ (中塚義実)

1994 年に世界各地におった「ミニサッカー」を「フットサル」に FIFA が統一したことをうけ、日本でも各都道府県にフットサル担当部署を設けることになりました。日本にフットサルが上陸し、2000 年代に入ると都内のフットサルコートでフットサルを楽しむ高校生が増え始めたことを受け、2001 年度より、東京都サッカー協会主催で U-18 フットサル大会を開催することになりました。オフィシャル大会としては全国初の試みです。この大会以降、U-18 年代のフットサル大会は、民間企業や協会主催の大会が各地で行われるようになりました。

こうした流れを受け、本多克己氏が筑波大学附属高校の中塚を訪ね、「U-18 フットサルの全国大会をやろう！」と打ち合わせをしたのが 2011 年 9 月のことです。日本フットサル連盟の大立目佳久さんや府中アスレチッククラブの中村恭平さんにその場で連絡を取り、方向性を確認しながら協力を要請し、2012 年 3 月に第 1 回の全国大会を開催しました。翌 2013 年 3 月の大会は日本フットサル連盟主催となり、同時にサロン 2002 公開シンポジウム「U-18 フットサルを語ろう！」を開催、JFA フットサル委員長の松崎康弘さんや大立目さんにご登壇いただき、この大会オフィシャル化し、今回の JFA 主催の全国大会へと発展してきました。

JFA 公認の第 1 回大会となる本大会の出場チームは、全国各地の予選を勝ち上がった 16 チーム。その内訳は、高校サッカー部のトップチーム、2 軍、クラブユース連盟に加盟するサッカークラブのチーム、あるいは F リーグの下部組織や地域で活動するフットサルスクールまでさまざまでした。開催地・東京代表の関東第一高校は墨田区が地元の学校です。サッカー部でトップチーム登録をされていない 3 年生で構成されたチームですが個々の能力は高く、トップチームのメンバーや保護者、地元の方々の大きな声援を受け、大会の盛り上げに大いに貢献しました。

### 補足 ～全国大会設立の背景～ (本多克己)

全国大会がこういった形になった経緯は、40 年前に流れがあると考えています。日本初の法人格を持ったスポーツクラブは、賀川さんたちを中心に作られた「神戸 FC」です。このクラブができた当時は、中学生なら「中学大会」、高校生なら「高校大会」と身分別の大会しかなかったため、協会に対してクラブチームも参加可能な年齢別大会の必要性を訴えていました。

2013 年 3 月のサロン 2002 公開シンポジウム前は、U-18 のフットサルを普及させるために、冬の高校選手権と同じように「高校生大会」とする構想もありました。しかしシンポジウムでの賀川さんの発言などもあり、FIFA の示す年齢別でフットサルの大会を行うべきであるという流れができ、今大会の名称は「第 1 回全日本ユース (U-18) フットサル大会」となりました。

出来あがったこの大会には、神戸 FC 創設時の理念と、昨年度のサロン 2002 のシンポジウムが関わり合っていることを見て、非常にうれしく、誇らしく思っています。

## 本編1 ～フットサルの歴史～ (以下、賀川浩)

*「今もフットサルを観ながら、W杯も面白いけど、フットサルも面白いな。どんな形でもサッカーは面白いなど改めて感じました」*

1950年代初め、大阪の府立体育館で関西OB選抜対関西学生選抜が室内サッカーの試合を行いました。恐らく日本における室内サッカーの最初であると思います。この試合は当時の館長の岩野次郎氏が、ドイツ留学時にみた室内サッカーを日本でも行おうと考えたため、開催することになったものです。岩野先生は体育館の壁をボールが当たっても壊れないように作り、日本でも室内サッカーができることを示しました。

当時の学生選抜はちゃんとボールが止められず、狭いコート内をコロコロとボールが転がってしまい、結果としてOB選抜が圧勝したと記憶しています。当時この試合をみてこの競技はちゃんとボールを止めないといけないということが分かりました。また日本のように狭い土地で、多くの人がボールを蹴るには室内の狭いスペースも利用することは絶対に必要であると感じました。

## 本編2 ～フットサルの意義とこれからの展望～

*「都内でボールを蹴る場所が減っているのであれば、どんどんフットサルをやってもらうのがいい」*

人間は日常生活では手を良く使う。また日本では、野球など手を使った遊びが盛んにおこなわれてきた。しかし、サッカーをするためには足を使うことを子どもの時から習慣にしなければならないと考えています。私の出身校である神戸一中では、ゴムまりを蹴っている子どもたちが多く、このような背景で、特別に運動神経のいいメンバーがそろってなくても、全国大会で優勝することができたと思います。どんな形でもボールを蹴ることはサッカーには一番大事です。いま都会でボールを蹴る場所が減っているのであれば、狭いスペースで出来るフットサルを普及させるべきです。

何十年か前にフットサルが始まったころと比較して、現在の子どもの技術は各段に高くなっています。ボールを扱うことを楽しめるようになっていくことは喜ばしいことです。これからU-18の全国大会予選が各地で始まり、競技者人口も増えて行くことが予想されます。これは88年前に高校サッカー選手権の全国予選が始まり、今日のような盛り上がりがあることと同じように、これからU-18で元気な若者たちがフットサルを盛り上げてくれることを期待しています。

## 質疑応答1 ～東西サッカー文化の違いとサッカーの歴史～

質問

「東日本と西日本でサッカー文化は違っていたり、東と西の選手でプレースタイルや取り組み方の違いというものはあるか？」

回答 (賀川)

東と西での相違点はグラウンドです。サッカーは冬にするスポーツであるとされていますから、東京のグラウンドは霜柱が立ち、ぬかるんでしまっているため、パスを繋ぐことは大変難しかったと思います。対して神戸は硬い

岩盤の上に砂が乗っているという状態で、冬でも平坦で堅かったため、サイドキックのダイレクトパスを繋ぐことは可能でした。このように地域によって差は生じていると思います。

サッカーの技術が最初に進歩したのは広島であったとされています。当時の広島には第一次大戦のドイツ人捕虜が沢山おり、彼らのサッカーチームのプレーは広島高等師範の選手のプレーよりも遥かに上手かった。これを観た高等師範の選手は、彼らのサッカーを学び、持ち帰ったことにより、広島のレベルは飛躍的に向上した。

その後大正 12 年、神戸一中はチョウ・ディンにサッカーを学ぶことでレベルが向上しました。御影師範にサッカーを教えに来ていたチョウ・ディンが宝塚の歌劇を見に行くということを聞きつけた神戸一中の先輩が、チョウ・ディンを待ち伏せして連れ出し、自分たちのわからないところを半日間指導を受けたのでした。チョウ・ディンから学ぶ前は「しっかり蹴れ」や「ちゃんと蹴れ」と言うだけで、誰も正しい蹴り方を知らなかったもので、一挙に目が開かれ、一気にレベルが上がったのだと思います。

## 質疑応答 2 ～シュート技術の向上とフットサル～

### 質問

「フットサルが盛んになることでサッカーのシュートが上手くなることはあるか？」

### 回答 (賀川)

グラウンドの大きさが違っていても、ゴールキーパーが守っているところへ攻めて点を取るということは同じであって、ゴールキーパーを動かすためにどうするかを考えるのはサッカーと同じです。多少の感覚の違いはあるが、セルジオ越後は「広いフィールドでするサッカーも、それぞれのスペースでサロンフットボール（フットサルの当時の呼び方）をしていることになる」と言っていました。

サッカーよりも狭いピッチでいつもシュートレンジにいることで、フットサルでは点を取ろうという意識が高くなるはずです。

## 第Ⅱ部 2014FIFA ワールドカップ・ブラジルを振り返って

### 導入 ～ブラジル滞在概要～ (本多克己)

賀川さんは 2006 年ドイツ大会までは、開幕戦から、もしくは開幕前の FIFA の総会から取材されていました。

今回のブラジル大会では、セルジオ越後さんから招待を受け、また現地でのガイド兼通訳としてセルジオ越後さんが帯同しました。大会中に観戦したのはまず、レシフェでの日本対コートジボワール戦、次にナタールへ移動してアメリカ対ガーナ戦、最後に日本対ギリシャ戦の 3 試合です。

### 本編 1 ～ブラジル滞在総括～ (以下、賀川浩)

「ブラジルにとってはちょっともったいなかった W 杯になったかと思います」

開幕前には FIFA 総会が開幕戦の会場都市にて行われます。以前はこの総会で会長の選挙や、次回開催地の決定

なども行っていました。W杯の本取材は通常、開幕戦から決勝までの約1カ月間行いますが、今回は、体調の問題もあり、往復を入れて2週間、現地には10日ほどの滞在になりました。

ブラジルには、これまで78年のアルゼンチン大会前にサンパウロに寄ってブラジルの空気を吸いに行ったことがありますが、今回は日本戦に合わせての滞在になったため、東北ブラジルに滞在することとなりました。東北ブラジルは最初にポルトガル艦隊の到着したところで、ブラジルが始まった歴史を感じることができました。またブラジルは非常に広い国であるため、レシフェからナタールまではバスで5時間かかりました。その途中にはサトウキビ畑ばかりの景色もあり、昔アルゼンチンで記者たちが大草原の中で、遙か先にいる牛の群れを望遠レンズでなんとか写真に収めようとしていたことを思い出しました。

ブラジルはもう少し野生味がありましたが、こうした広いところを見られたこともありがたかったです。またセルジオ越後とゆっくり話ができたことも思い出の一つになりました。

試合は観せませんが、サンパウロでは新しいスタジアムを見学し、5年ほど前にできたサッカーミュージアムも同じく見学し、非常に勉強になりました。ミュージアムの大きさから、勝利してきた歴史を感じ、日本はまだブラジルには勝てないと感じました。

ミュージアム内には1950年にウルグアイ戦で負けてしまった試合を真っ暗な部屋の中で観ることができました。部屋の暗さと同じように暗い気持ちでこの試合を観て欲しいという演出だったと思われそうですが、彼らにとってはそのくらい重い敗戦であったということでしょう。

今大会は汚名返上で優勝を目指しましたが、残念ながらネイマールが怪我をしまい、全体の調子が落ちたところをドイツに負けてしまったことが残念でした。

## 本編2 ～悪質なファウルとジャッジについて～

**「足でボールを扱い、手ではボールを扱わない、それは相手の体を手で掴まないと言うのに入っているはずなんです。」**

大会を思い返すと、ネイマールに対する後ろからのジャンピングアットがありました。考えられないことです。

このようなファウルが起きた背景に、ヨーロッパでもファウルの取り方が少し甘くなっているのではないかと。そして、そのままお互いやり合うことで感情的になってしまうことがあると思います。

過去、1982年大会では、ドイツのキーパーが飛び出してきたことによって、接触した選手が担ぎ出されたこともありましたが、サッカーははずみでそういうことが起こりうる競技という難しさはあると思います。

W杯の2年前にはヨーロッパ選手権があります。そのため新しいルールや解釈の変更について、1度試してからW杯に持ち込む形をとることが多くあります。例えばW杯にPK戦が導入された1982年スペイン大会の前に、1976年のヨーロッパ選手権決勝で導入されていました。そういった世界の最先端であるヨーロッパの試合を観ていると、ファウルの許容範囲を選手で勝手に判断している様子が見受けられます。特に、抜かれた後に肩に手をかけるなどのファウルが取られた時、レフェリーに詰め寄る様子からそのように感じます。サッカーは手を使わないということで出来あがった競技であるため、相手の体を手で掴まないということも、手を使わないということに含まれると言えます。つまり相手の肩に手をかけることが程度によって許されることはなく、行為そのものが罰せられるのです。しかし、ヨーロッパのサッカーはこの点がルーズになってしまっているように感じます。

また今大会の悪質なファウルに、スアレスが相手選手にかみついたことが挙げられます。しかし先に述べたネイ

マールへのファウルは、本来ならば悪質なファウルであるにも関わらず、処分されることはありませんでした。かみつくという行為が下品であったため話題になりましたが、ネイマールへのファウルも同じく、あまりにも危険なファウルであったため、処分されるべきものであったと思います。

### 本編3 ～ネイマールとペレ～

*「(ネイマールは) 僕らが観た中ではやっぱり歴代の大選手の系列に入るべき選手だと思った」*

優勝したドイツの総人口は約7千万人、そのうちサッカーの公式な競技人口は630万人に上り、世界一。しかし、もしもブラジルでも同じく正式に登録すれば、約5千万人に上るか予想できます。このことから、ブラジルはドイツのように組織的に選手を拾い上げて行くのではなく、各地に点在している才能のある上手い選手を見つけてきてプロにするという方法を取っていると言えます。

生まれつき足が速くてボールを扱う才能のある子は、神戸一中のような貧しい体つきの子どもたちの中にも100人に1人はいるもので、ブラジルではその割合はより大きいと考えられます。しかし、全員が組織的な指導を受けているわけではないため、例えば左足のキックも使ってみよう、というヒントを与えてもらえる子は少ないと言えます。

元ブラジル代表のロナウドも素晴らしい選手で、両足のキックが蹴ることができましたが、強引な横殴りの蹴り方で、正しい蹴り方ではなかったと思います。しかしネイマールは、ペレと同じく両足で上手くインステップキックが蹴れる選手であり、ここからネイマールはペレ以来のこのような才能の持ち主であると言えます。試合前やPK戦の前には、ネイマールが一番若い選手にも関わらず、他の先輩選手を励ましている様子がみられました。この点はペレも同じであり、彼らがいるかいないかでチームの雰囲気が変わってしまうという選手でした。

そのネイマールが準決勝は負傷で出られず、またキャプテンで非常に落ち着きのあるセンターバックのチアゴ・シウバも出場停止でプレーすることができませんでした。またコンフェデレーションズ杯では活躍した、ブラジルでは珍しい大型ストライカーのフレッチも出来が悪く、全体的には全然良くなかったという印象を受けました。

加えて、ブラジルは開催国であるため予選を免除されており、実戦経験が非常に少ない中でチームを作らなければならなかったことも関係していると考えられます。確かに開催国が予選で敗退してしまうことは問題ではありますが、今後 FIFA がこの状況をどうとらえるのか、また各国の協会がどのように努めるのか考えていく必要があると思います。

### 本編4 ～21世紀のサッカーの進化～

*「スペイン代表の欠陥はメッシがいないこと、アルゼンチン代表の欠陥はメッシはいるけど、バルセロナの選手がいないことだと僕は思いました」*

1974年大会の決勝で対した、ベッケンバウワー率いる西ドイツと、クライフ率いるオランダの試合は、まさに21世紀のサッカーを観たという試合でした。両チームにレベルの高い選手がそろっており、オランダはボールを囲い込んで奪い、ボールを奪ったら選手が後ろから追い越していくというサッカーを展開しました。ただしこのサッカーは弱い相手に対しては完全に押し込んだ試合ができますが、相手が西ドイツのように強くなると、追い越す選手へ正確なパスを出せる選手はクライフしかいないという欠陥を抱えていました。対する西ドイツはW杯前のチ

チャンピオンズカップでアヤックスとバイエルンミュンヘンが対戦し、バイエルンミュンヘンが負けてしまいました。しかしそこから、西ドイツの選手はオランダのトータルフットボールを理解し、加えてフォクツがクライフをマンマークでつぶしたことで上手く試合を支配しました。これによって上手いかわなくなったオランダは、近代的なサッカーを捨ててロングボールを蹴り込む戦い方に切り替えました。これは今回のザッケローニ監督の日本でさえ、点が取れなくなるとロングボールを始めたように、攻撃が停滞するとロングボールに頼ることはいつの時代でも同じであると言えます。

また、ベッケンバウワーはストッパーの後ろで相手のボールを奪い取るスイーパーとしてプレーしながら、時には攻め上がりパスもシュートもする選手でした。スタートのポジションは後ろでありながら自由に動き回るため、イタリア語の自由を意味する「リベロ」というポジションを新たに作り出し、彼がそれを実践することでこのポジションを確立することができたと言えるでしょう。

しかし先に述べた21世紀のサッカーがヨーロッパ全土に広がりを見せるのは74年よりも後でした。例えばイタリアではアリゴ・サッキが監督になって、前からプレスをかけるサッカーを展開したミラン、スペインではクライフが監督として戻ってきたバルセロナが現れた80年代後半から90年代前半になってからでした。バルセロナは教育方針を一つにまとめ、またボールを止めて蹴ることに全く気を使わない選手を集め、いわゆる追い越すサッカーをクライフ監督が展開し成功を収めました。そのクライフのチームを、次はグアルディオラが引き継ぎ、そこへメッシという天才とシャビやイニエスタらの小柄で巧みにボールを扱える攻撃プレーヤーが現れたことで、同じく成功を収めました。

グアルディオラのバルセロナでは、170センチ代の選手が中心となって独特のテンポでボールを回します。シャビやイニエスタ加えてメッシは身長も近く、足の長さも同じぐらいのため、足の振りも同じようになります。仮にトレスのような大型のストライカーが入ると、足が長いと、同じようにインサイドやインステップでボールを蹴ってもシャビやイニエスタと微妙にパス回しのテンポに違いが生じてしまします。しかしメッシは、シャビやイニエスタと近い身長と高い技術を持つため、彼らと同じテンポでボールを回すことができ、結果としてバルセロナのサッカーは上手いといったと考えます。

このことから、スペイン代表の欠陥はメッシがいないこと、反対にアルゼンチン代表の欠陥はバルセロナの選手がいないことであると思われます。特にスペインは、早くにオランダに負けてしまい、非常に残念でした。年齢層が高いメンバー構成にしたことは、少し運動量の部分で無理があったように感じています。

## 本編5 ～優勝国ドイツの強さ～

*「狭いスペースでボールを処理できる選手は絶対に必要であるとドイツの首脳陣は思っていたのでしょう」*

ドイツの選手はもともと走る能力が非常に高く、その上に組織力、技術力を加えたチームでした。特にボールを止める・蹴る・ドリブルする、という個人的な技術力を大切に育ててきました。日本で指導を行ったクラマーの言葉を借りると「ボール扱いが最初の扉である」ということです。技術力向上のために反復練習を繰り返し、その結果からエジルやラームのような小柄ながら技術の高い選手を輩出しました。

その中でゲッツェは、所属するバイエルンミュンヘンでは常にレギュラーとしてプレーしたわけではありませんが、非常に高いボールテクニックを評価され、代表入りした選手です。そのゲッツェが初戦の強豪ポルトガル戦では右FWに入り、先制点となるPKを獲得しました。このプレーで興味深かった点は、右サイドでミューラーがボー



ルを動かした後、エジルに渡し、そのエジルが前へボールを出すふりをして後ろへ落とすという、遊びが入ったプレーをしているところですね。昔からドイツは速攻主体の国でしたが、こうしたブラジル人がするような遊びが入ったプレーをドイツの選手ができるようになってきていることは驚きでありました。

その後、ゲツツェはベンチに下がりますが、決勝では最後のチャンスで得点を奪いました。狭いスペースでボールを処理できる選手は絶対に必要であるとドイツの首脳陣は思っていたのでしょうか。生まれつき技術が高い選手が、体も強くなり、小さくても持ちこたえられるようになるであろうことを見越して育成し、代表に入ってくることから、ボールテクニックの重要性をドイツ全体で理解していることを垣間見ることができました。

今回のドイツ代表は、先に述べたエジルやゲツツェのような選手もいれば、シュバインシュタイガーのように走りまわり体を投げ出してボールを奪う、古くからの典型的なドイツの選手もおり、精神的な要素、肉体的な要素に加えてボールを大事にする技術がかみ合ったいいチームでした。いつも沢山点が取れ、試合を支配したわけではありませんが、PK 戦をしなくて優勝までもっていったことから考えても、ドイツの優勝は良い傾向であると感じました。

## 本編6 ～ザッケローニのマネージング能力とクラマーの気遣い～

*「選手達をどういうふうに良く試合に向かわせるか、クラマーは、彼はそういうことので天才だった」*

本大会の日本代表は、試合に勝つということへの気持ちを見せることができませんでした。この点に関して、ザッケローニは大会に臨む際に、選手たちのモチベーションを上手く上げることができたかどうかという点で疑問を感じます。セリエAで結果を残している監督であるので、リーグ戦での選手のコントロールは理解しているでしょうが、W杯のように短期間の一つの大会に臨む選手をどうマネージメントするかについての理解に乏しいように感じられました。

この点に関して、かつて世界選抜を率いたクラマーは非常に上手かった。例えばクラマーは、選手同士の出身地や性格から、相性の良い組み合わせで部屋割を考えたり、部屋の窓からはきれいな海がみえるよう手配したり、あるいは選手の各部屋に支給されるユニフォームの配置についても細かく指示を出していました。一つの試合に行くことに非常に気を使う監督であったクラマーに対して、ザッケローニがW杯に向かう選手たちの心を上手く掴むためにどのように取り組み、またそれが通訳を介しても上手く伝わっているのかについては疑問が残りました。

## 本編7 ～試合の流れを掴めなかった日本代表～

*「(コートジボワール戦の先制点あとの) 流れの中でもう1点取れないというのが(世界との) ちょっとした差なんですね」*

サッカーの試合を観ていると、双方がそれなりに高いレベルであれば、どちらかが有利にゲームを進める流れと、流れが生じるきっかけが存在しています。コートジボワール戦の日本の場合、試合開始時から相手と走りあいの勝負に持ち込まれて、非常に苦しい展開となりましたが、その中で岡崎が、怪我も恐れぬファイティングスピリットでハイボールを競り合ったことがきっかけとなって流れが日本に傾きました。この流れに乗り、日本は本田が先制点を奪うことに成功しました。しかし、その流れの中でもう1点を奪うことができず、後半出場のドログバの登場というきっかけでコートジボワールが再び流れを掴むきっかけを手に入れました。日本はそのドログバに対してファウルも辞さない攻撃的な守備を見せればよかったものの、その流れに飲まれ、立て続けに失点し、負けてしまい

ます。前半掴んだ流れの中から追加点が取れなかったことが世界とのちょっとした差であると考えます。

サッカーというスポーツは、きっかけが来ている時にそれを掴んで流れに乗れるか、流れが相手に行ってしまった時にどう耐えるか、この点で上手く戦えなければいけないスポーツです。しかし、それについての訓練が十分に なされていなかったように感じます。

日本は細かくパスを繋いで点を取る、相手は多少大まかに攻めてきて、1対1の仕掛けやセットプレーによって点を取ってきました。これは日本サッカーの歴史を紐解いてもそのような失点の仕方を、1930年に参加した第9回極東大会での中国戦以来繰り返してきてしまっている。この試合では最終的には3-3の引き分けとなりましたが、今回は2点目、3点目が取れなかったことで負けてしまったと言えます。日本の技術がいくら向上しても、体の大きさは変わらないのだから、相手よりも1.2倍は走る、横綱ではない戦い方をしなくてははいけないと思います。

## 本編8 ～これからの日本代表～

*「失望した方も多かったみたいですが、今の日本の育成から何から全部見れば、今回の結果はやっぱりええとこじゃなかったかな」*

今後の日本代表に1番大切なことは2010年南アフリカ大会で岡田監督がやったように、190センチ近い大柄のセンターバックを2人並べることです。他の選手が小柄である分、世界と戦うために中央には大きな選手が必要であると思います。2センターはがっちりとしたディフェンスの専門家が必要ということです。

今大会で残念だったことは、練習してきた自分たちの理想とする攻撃が出来なかったこと。しかし、ショートパスを細かく繋いでミスなく攻撃が成立することは、1試合にそう何度もできることではありません。せいぜい1試合に1点分、もしも1試合に5点分チャンスを作り出すことができれば、そのチームは非常に強いと言えるのです。

そういったサッカーを目指すに当たり、この4年間の練習量や試合数で本当に準備出来るのかについては疑問が残りました。

現在の日本には、放っておいてもボールテクニックを身につけた選手が現れ、そういった選手たちを見出しやすくなった時代が来ています。例えば、現在ガンバ大阪で活躍する宇佐美は、本来なら今大会で活躍しないといけない才能の持ち主です。協会は、各年代の才能ある選手たちを見極め、上手く引き上げて行くことが必要であり、非常に重要であります。

日本全体がここまで努力し、今回のW杯まで行けたこと、また大会中には自ら仕掛けて点を取ることが出来たことから、決して悪いことばかりではなかったと感じています。今後の育成に向けては、過去の指導をもっとしっかり勉強する必要があります。例えば、今の日本はストライカー不足、得点力不足と言われていますが、過去の代表には釜本という世界的なストライカーがプレーしており、今の指導者たちは、いかにして釜本が現れたのかを勉強しなければならないと思います。

以上

## おわりに ～当日の感想と本報告書作成に関して～

8月よりサロン2002のメンバーになりました筑波大学人文学類4年、元筑波大学蹴球部の春日大樹と申します。今回は始めてサロン2002の月例会に参加し、また当日の内容のテープ起こし、報告書作成を担当しました。

月例会当日は、第I部にありました、フットサル全国大会の準決勝を、賀川先生、中塚先生、本多さんと共に観戦し、月例会には頭から参加させていただきました。会は終始和やかな雰囲気の中進められ、賀川先生のジョークには会場から笑いがたびたび起きておりました。私自身、初めての参加に加えて最年少参加者ということもあり、はじめはその空気に緊張しているところもありましたが、先生の興味深いお話と、時折見せられるお茶目な語り口のおかげで、本当に楽しい時間を過ごすことができました。同時に賀川先生のように長くサッカーに関わることができればと思いました。

本報告書作成の際に、2時間20分にも及んだ興味深く楽しいお話をすべて載せることは分量の関係上できなかったこと、またこのような文書の作成が初めてであったため、読みにくいところも多々あるかと思いをこたえをお詫びするとともに、今回参加できなかった会員の皆様が、こちらの報告書から当日の様子や講演内容について理解していただくことができましたらと思っております。

簡単ではありますが、結びの挨拶とさせていただきます。

筑波大学人文学類4年 元筑波大学蹴球部  
春日 大樹